

ハイエク 価格と生産

1931

Friedrich August von Hayek
Price and Production

一九二〇年代から三〇年代にかけて、資本主義社会はかつてない危機にさらされていた。第一次世界大戦後の各国経済の疲弊、戦争特需の終了、そしてヘゲモニーの転換が経済的には世界恐慌という形をとって現れたのである。二〇％を切るものがなかった失業という現実を前にして経済学は急速に成長する。その象徴的存在が、ケインズの『一般理論』（一九三三）である。しかし、その陰で多くの旧来の経済理論の存在が覆い隠されてしまった。本書もまたそうした理論の一つである。

ハイエクの本書での目的は、貨幣的要因から大恐慌の説明を行うことであつた。オーストリア学派の資本理論は、最終財の価値がそれを生産するために使われる各種の生産財の価値を決めるというカール・メングーの理論に基づいている。たとえば、現在熟成中のワインの価値は、将来このワインが市場に出たときの価値が決める。つまり、葡萄を樽につけ込んでからワインとして出荷されるまでの熟成のそれぞれの段階にある葡萄の価値は、最後のワインの市場価格によって決定されると考えるのである。いま、五年寝かしたワインを出荷している農家があるとする。葡萄を育てたり樽につけたり熟成中のワインを管理したりするために労働者に支払った費用は五年後にならなければ回収できない。この間の費用を資本としてワインの生産農家は前もって用意しなければならない。

ハイエクはこの理論を使って大恐慌を説明しようとした。再びワインの例を使って説明しよう。あるとき突然ワインに対する需要が落ち込んだとする。農家は落ち込んだ需要にあわせてワインの生産を縮小しなければならない。このとき、いままで需要者がワインに使っていた所得は貯蓄に回っている。金融市場

大恐慌の時代
の中で変遷する経済学の潮流

フリードリヒ・アウグスト・フォン・ハイエク (1889～1992)

ウィーン大学に学び、LSE、シカゴ大学、フライブルク大学教授などを歴任した。1974年にはノーベル経済学賞を共同受賞した。代表作に『自由の条件』(1960)、『法・立法・自由』(1973、1976)がある。

●『価格と生産』(古賀勝次郎訳、ハイエク全集1、春秋社)

ではこの新たに発生した資金供給のために利率が低下している。利率の低下は、より時間のかかるワイン生産を可能にする。利率の低下は時間にかかる費用を減少させるからである。その結果、低下した需要に対応した形で、より時間のかかる(したがって高級な)ワインが市場に出回ることになる。低下した需要に対応して生産構造の調整が行われ、労働者もまた吸収される。

これに対して、今度はワイン需要量はそのまま銀行が信用創造を行い利率が低下したとしよう。農家はやはり資金を投入してより熟成期間の長いワイン作りをしようとするので、需要量に変化していないにもかかわらず、市場に現れるワインの量が減少してしまう。市場ではワインが品薄となり価格が上昇する。このインフレーションは、新たに投入された資金が完全に労働者の所得となるまで続くことになる。しかし、問題は価格の上昇が一時的なものであることをワインの生産者が認識しているときである。この場合、時間をかけてワインを生産しているよりも今すぐ市場にワインを出した方が有利である。その結果、ワイン業者はより長期的な生産方法を放棄し、すぐにワインを市場に出荷しようとする。この過程で用意された資本はすべて無駄になり労働者も放出される。この現象が社会的に発生するのが恐慌である、とハイエクは考えた。

いくつかの仮定が認められるとすればハイエクの主張は理論的には正しいものであった。しかし、彼の議論の中からは他の伝統的な経済学と同様、失業はあくまで調整過程の摩擦的なものとしてしか扱われない。大恐慌に世界中が苦しんでいる時代に彼の議論が次第に忘れられていったということは必然的であるかもしれない。後の理論的な改良にもかかわらず、ハイエクの主張は次第に魅力を欠くことになっていった。現実の問題解決に対する経済学者への社会的な期待が、経済学の潮流を決したのである。彼が次に登場するのは一四年後、経済学者としてでなく自由主義の旗手としてであった。『隷従への道』(二九四四)が、世界的なベストセラーとなりそれを契機にハイエクは次第に経済理論に対する発言の回数を減らしていくことになった。

▼江頭進